

【 会員投稿 】 ◇ ジミー没後50年によせて (1)

大槻伸次

今年、平成19年7月15日の夜9時、NHKの日曜ハイビジョンシネマで「エデンの東」が放映された。「エデンの東」は、過去に幾度となくテレビ放映されているので新鮮さはないが当時の特別な思い出のある映画だけに2年ぶりに見てしまった。

2年ぶりというのは前回NHKで放映されたのは平成17(2005年)年だった。というのはこの年、ジェームス・ディーン(愛称ジミー・1931年2月8日インディアナ州フェアモント生。)没後50年という節目の年だったからである。

ジェームス・ディーンは今から52年前、ハリウッドの映画界に彗星のように現れ「エデンの東」、「理由なき反抗」、「ジャイアンツ」という三本の名作を残して彗星のように消えていった。

そして約半世紀余り前の昭和30年10月14日、東京はピカデリー劇場でジェームス・ディーン主演の第一作「エデンの東」は日本で初公開(前評判は良かった。)されることになった。ところが、主演したジェームス・ディーン本人は日本初公開の2週間前の9月30日、愛車「ポルシェスパイダー23」を駆って事故に遭いカリフォルニアの一地点に、24年7か月の生涯を閉じてしまった。当時の夕刻のラジオニュースで知って驚いた。

その後、映画「エデンの東」は日本で予定通り公開され爆発的にヒットした。そして同名のテーマ曲「エデンの東」のサウンドトラック版もヴィクターヤングの演奏版もすごい人気(自分も買いあさった。)で長期間ラジオから聞かれぬ日はなかった。余りの長期間熱狂的なリクエストが続いた為、困り果てた放送局はリクエストを中止したほどだった。もちろん主演したジェームス・ディーンへの憧れも並大抵なものではなかった。映画評論家の小森和子(享年95歳)さんは「こもりのおばちゃま」の愛称で親しまれジミーを愛し、ジミーが亡くなったときに親しい人たちに葬式饅頭を配ったというほどに敬愛していた。後に、お墓参りに出かけたことが懐かしく思い出されると語っていた。

昭和30年は敗戦から10年経過していたが経済的には現在と比較しようもないほど貧しくて娯楽の少ない時代だった。我家では7人兄弟の末っ子が生まれ、77歳の祖父が亡くなった。国政では55年体制が発足し、教師の勤評導入の年でもあった。小学校長をしていた伯父は勤評導入反対の教職員組合員達に自宅に押しかけられるとあって我が家に避難したこともあった。

私は、多感な中学2年生(弱冠14歳)だったがあれから半世紀、長い歳月があつという間に流れ去つたというのが今の実感である。

当時、我が家で唯一の娯楽といえば飴色のニス塗られた箱に収まった性能の悪い再生式並四ラジオだった。後に普及する(ぼちぼち普及していたが貧乏暮らしの我が家では買えなかった。)高性能なスーパーヘテロダイン方式とは全て異なる旧式な代物。ピーピーギャーギャーと混信のなかから聞こえてくるドラマ(菊田和夫のラジオドラマ“君の名は”や赤銅鈴之助などが大ヒット。)や歌謡曲が唯一の楽しみだった。昭和28年、テレビ放送(白黒)は始まっていたが、テレビ受像機は高価なものでまだまだ一般的でなくプロレス放送のある日は他所様の家に見に行った。こんな時代背景のなか映画は代表的な娯楽だった。といっても小遣いはなかなかもらえず、友達が映画に誘いに来ても断ることが多かった。

そして昭和32年3月中学を卒業。町工場就職と同時に太田高校定時制に進学した。定時制では授業の一環として毎月映画教室(生徒会では文部省選定の名作洋画を主に選定したようだ。映画は大体二本立てで、例えば目的の洋画の「白鯨」と同時に上映されたのが「錆びたナイフ」だったが裏作品のほうが娯楽性かあって楽しかったというのも多々あった。)が催され映画への興味が深まった。

当時は、話題の超大作洋画は東京などの大都市の映画館で長期間ロードショーされるのが一般的で、太田のような小さな地方都市で上映されるのはそれから2~5年も経過した忘れかけた頃だった。そうであるからせつかくの機会を見逃したら再上映のチャンスはめったになかった。そこで、アンテナを高くして近隣都市の映画館の上映のチャンスをじっと待つしかなかった。そうだからその作品への思いは募っていったのかもしれない。



【 会員投稿 】 ◇ ジミー没後50年によせて (2)

現在では見たいと思えばいつでもビデオをレンタルしてくれば視聴可能な便利な時代になったが、その分感動は少なくなっている。当時、映画雑誌の「スクリーン」や新聞・ラジオによる「エデンの東」の評判にわくわくし一刻も早い太田での上映を待ち望んだ。その頃は、東京へ観に行くなんて時間もないし金もなしで考えられなかった。

それから約6年が経過(昭和36年4月)したころだった、太田市街のあちこちに「エデンの東」上映の予告ビラがベタベタと貼られた。上映映画館は大門通りの洋画専門(日活も上映した)の、西映画劇場(現在は、山車の倉庫になっている)だった。自分としては一日千秋の思いでその日を待った。

そしてその日、映画を観終わったときの感想は前評判どおりで、頭をぶん殴られたような感動を覚えたのを記憶している。ところが今になって映画の何処にそんなに魅かれたのだろうか、なかなか旨い言葉には言い表せないでいた。

ところが平成17年のある日の毎日新聞記事に、ジェームス・ディーン没後50年に寄せて、評論家の川本三郎氏が「泣く男の登場」というタイトルで寄稿しているのを面白く読んだ。ハリウッド映画の世界では、男性スターは男性的な強さが重視されまず泣かなかったというのだ。ゲイリー・クーパーもハンフリー・ボガードも、クラーク・ゲイブルも、ジョン・ウェインも泣かなかった。人前で涙を見せるなど男性として失格だという考え方が強くあったようだ。

これまでの、強くたくましく頼りになる大人の男と違ってジェームス・ディーンは、弱々しく繊細な若者だった。ハリウッド映画史上はじめて登場した、傷つきやすい若者といっている。

戦後の若者スターの随一はマーロン・ブランドだったというがブランドには野生的な逞しさがあり反抗的なふてぶてしさがあつた。ジェームス・ディーンはマーロン・ブランドのイミテーションのように云われたがマーロン・ブランドのような強烈な個性はなかった。ジェームス・ディーンは映画の中でよく泣いたというものだ。我々が子供の頃、親父から男はめそめそなくもんじやないと教育されてきた。だから自分はそう思っていたし子供にもそう云ってきたように記憶している。

では、自分は泣くことを知らないかといえそうではない。小学生のころ学校で映画教室に連れて行かれ主人公の不遇に涙したり、疎開していた友達と別れを惜しんで泣いたり、兄や友達と喧嘩して何時も負けて泣いた。また、母親の涙にもらい泣きしたりと意外と泣いた記憶がある。サラリーマン時代にも顔で笑って心で泣いてという場面は多々あった？両親や兄弟が立て続けに亡くなったことも心の中は毎日涙だった。また最近は何のせいか、涙もろくなりドラマを見ても涙がこぼれてしまう今日この頃である。涙にもいろいろあるが今は男だろうと涙を我慢する時代でもないしとにかく自然体がいいね。

私がジェームス・ディーンの出演する作品に感動したのは、川本三郎氏が言っているように“弱い男”を演じる男の登場への新鮮さだった(この映画を転機にハリウッド男優の涙も当たり前になったようだ。)といっているがまさに正解を得た思いだった。

一昨年(平成17年)のNHKのBS放送ではジェームス・ディーン没後50年の特集を組み、彼の出演した作品や彼の死後創られた回顧映画、「ジェームス・ディーンのすべて:青春よ永遠に」、「ジェームス・ディーン物語」なども放送された。また新聞や雑誌に、彼に関わる回顧記事(例えば「泣く男の登場」などなど。)が多く見られた。また、本屋さんでは写真集などの出版物も散見された。

自分は、久しく会わなかった友達に会ったように懐かしく見させていただき若かりし頃を回顧している。他に、彼のポスターやポートレートなども相変わらず人気を呼んでいるようだ。

没後50余年以上もして脈々と行き続ける彼の人気に現役ハリウッドスターが羨望のまなざしでいるという話題を耳にしたことがある。彼は人気の絶頂期に亡くなったためそのときの評価のままでいられるというのだ。

現在日本では、韓国映画「冬のソナタ」に主演した韓国人俳優のヨン様ブームとやらで年配の女性たちが夢中になり映画の舞台となった韓国まで出かけロケ地を訪ね歩き自分の初恋と重ねあわせて青春を回顧しているという。「エデンの東」がヒットした当時もそうだった。あれから50余年、昭和は遠くなってしまったがいくら時代は移ろい変わろうが名作に感動する気持ちと行動はいつの時代でも同様であり、私もその感動する心をずっともち続けたいと思っている。

< 完 >



<大槻伸次さんです>